

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2007年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 コミュニティ福祉学 研究科			コミュニティ福祉学	専攻
指導教員	所属・職名		氏名		
	コミュニティ福祉学部 教授		福山 清蔵 印		
自然・人文の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/>		個人・共同の別	<input checked="" type="checkbox"/> 個人 <input type="checkbox"/> 共同 名	
研究課題名	遺児の心理的支援—あしなが育英会レインボーハウス「火山の部屋」の機能分析を通して				
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	コミュニティ福祉学研究科・コミュニティ福祉学専攻・博士前期課程1年		竹島 史織 印		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
研究期間	2007 年度				
研究経費	200 千円				

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

現在日本において遺児に対する心理的援助はほとんどなされていない中、あしなが育英会は阪神淡路大震災後「レインボーハウス」という遺児の心理的支援を目的とした施設を神戸に設立した。そして昨年春から活動を開始した「東京レインボーハウス」に一年間筆者は携わり、そこにおける実践とインタビュー調査、活動に参加した親子の日記の記録等からあしながレインボーハウスにおける遺児への心理的支援を考察した。それらによりレインボーハウスにおける「遺児つどいのプログラム」の改善していくこと、また日本における広い広報活動に今後より一層力を入れていくことが遺児の心理的支援において重要であることが明らかにされた。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[遺児] [心理的支援] [東京レインボーハウス]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

当初筆者は申請書にて 1999 年より活動を始めている「神戸レインボーハウス」で調査を行うと申請をしていたが、先方の都合により今年度(2007 年度)から活動を始めた「東京レインボーハウス」にて調査を行うこととなった。今回筆者の研究は遺児自身の心の傷に触れる場をフィールドとするため、事前に遺児やレインボーハウスの職員と関係性を築いておくことが必要不可欠となるのであるが、東京で調査ができることとなったことに伴い当初の予定より施設に頻繁に通うことができたことが何より研究にとって良かった点として挙げられる。多くのマスコミでも報道された日本では初の試みとして東京レインボーハウスにて行われた「全国の小中学生遺児の心のプログラム」にも筆者は参加することができたことにより関係性はより深めることができた。またレインボーハウス活動の時間だけでなく日ごろから施設のボランティアや職員等と交流が持つことができたことによりレインボーハウス内のみの活動に留まらず、レインボーハウス外でのあしなが育英会の遺児支援活動や遺児の様々な背景、現状を把握しながら東京レインボーハウスの初年度の活動を追うことができ、研究の視野を広げ深めることができたと考える。

当初筆者は

〔2007 年度〕－レインボーハウス内で行われている遺児の自分史語りのセルフヘルプグループ「つどい」で会話から遺児の「怒り」を分析する。

〔2008 年度〕－「火山の部屋」にて子どもの参与観察。

→修士論文－それらを踏まえて修士論文では遺児の心理的援助について考察する。

と申請していた。しかし実際に「つどい」に参加してみると「怒り」の話を聞ける以前にほとんどの子どもたちがきちんと「親の死」を語ることにできない現状とぶつかることとなった。毎回「つどい」のプログラムは 2～3 日の宿泊型プログラムの中の真ん中辺りに設けられており、プログラム中共に過ごしてきた子ども(年齢別によって編成)・職員・ボランティアが 15 名ほどのグループとなって行われる。職員から「①親を亡くした時期②死因③今食べたいものを 1 人ずつ話すこと。話したくなければはなさなくてよいこと。」以上 2 点を指示がありグループは始められる。小学生は泣いたり、またごまかしたりしながらうまく表現しないながらも、少しは何かを発信しよう、という姿が垣間見られたが、一方中学生はほとんどの子どもが固まり話すことをパスをしたとのことだった。(私は小学生グループ担当だったので、中学生グループには参加できなかったが中学生グループに立ち会った職員・ボランティアに話を聞いた。)

またレインボーハウスにはグリーンワークを促進するための複数の部屋がそれぞれの目的を持って存在している中、やり場のないストレスや、怒りを発散できるようにという目的の元に作られている当初参与観察を予定していた「火山の部屋」の子どもの利用率が悪い。

これら「きちんと親の死を語ることにできない現状」と「部屋の利用率」は何を表しているのか。筆者は一年間の活動に携わった経験から遺児たち自身が自分の感情を封じ込めることで生き残ってきた人生の経験の積み重ねの結果であると考え。筆者の見てきたレインボーハウスを訪ねてくる遺児はプログラム活動中だけでなく日常生活を見ていて同世代の子どもに比べ全般的に自己表現が苦手であったり、消極的であったり、遊ぶ時間になっても行動できなかつたり、遊んでいても静かに遊ぶ子どもが多かつたり、と「表現すること」に長けていない子どもが多いと感じられた。宿泊型プログラムの最後に子どもたちが書く日記の記述からも普段自分の感情を自由に表現できていないことが伺われ、また元気にしているように見えて実生活では心因性による嘔吐が続いている子どももおり、はっきりと表には出さないが心因性による病を診断されている子どももいた。時岡(2003)等の先行研究からも親を亡くした子どもが親の死を語れない傾向があることは明らかにされているが、日常生活の行動や遊びの中でも自分の感情や行動を封じ込める傾向があることが伺われる。

またレインボーハウスに隣接している大学進学支援を目的に設立された遺児の大学生の寮「あしなが心塾」の学生とも筆者は寝泊りを繰り返してきたが、彼らもやはり同世代

研究成果の概要 つづき

の大学生に比べて自己表現が苦手な自己を封じ込めるタイプの学生が多いと感じられた。遺児は外に傷を負わず「普通の子」に見えてしまう分、社会によってつらさや痛みを封じ込めさせられながらなんとか生き抜いてきた1つの表れだと考える。そんな感情表現の苦手な彼らは自分の感情をダイレクトに言葉で表現する「つどい」や行動で表現する「火山の部屋」で戸惑ってしまうのではないか。

しかし「つどい」や「火山の部屋」がただ「遺児を戸惑わせるもの」として終結しているわけではない、と筆者は考える。宿泊型プログラムの最後に子どもたちの日記には「プログラムに来てよかった」「すっきりした」という記述が多くあり、「さびしさやつらさを共感できる仲間がいて、がまんしなくても声にしていいんだと思った。」(中2男子)という記述、また参加した子どもの母からも「私に対する態度が変わりました。いろいろと話してくれるようになりました。私も今まで長い間ありとあらゆることを黙ってただ処理してきましたが、これからは長女と話していけるのかなと思いました。」という記述があった。レインボーハウスにおける「つどい」や「火山の部屋」の存在は親の死と直面し、悲しみや辛さを抱え封じ込めることで生きてきた子どもたちに「もっと表現していいんだよ」というメッセージを送り続けている、と考えられる。社会の中では「暗に親の死を封じ込めるように」というメッセージを受け取ってきた彼らに、レインボーハウスに来て「表現しても良い」というメッセージを感じ取って帰ってもらうことはレインボーハウスを訪れた子どもへの何よりもの「心理的援助」と呼べる。

その「心理的援助」にあたり1年間の宿泊型プログラムを振り返り、プログラムの改善点を指摘したい。レインボーハウスの宿泊型プログラムの毎回の一番初めに組まれているプログラムは「レインボーハウス探検」である。子どもとボランティアの大人を含め少人数のグループを作り一緒にレインボーハウス内をまわるプログラムなのだが、このプログラムは状況によって割愛させられることの多いプログラムでもある。しかし、このプログラムは子どもに「表現しても良い」というメッセージを感じ取って帰ってもらうためには非常に重要なプログラムであると考えられる。宿泊プログラム中子どもによって行きたがる部屋もばらつきがあり、このプログラム後全く訪れない部屋も出てくることを考えると、グリーンワークには必要な1つ1つの部屋のメッセージを受け取ってもらえる最初で最後の時間となる。ただまわるのではなく「この部屋は何があるんだろう？何をしよう？」と大人が子どもの想像力を膨らませられるような1つ1つの部屋の探検の仕方をする事により、1つ1つの部屋のメッセージ(ex.「火山の部屋」-「怒ってもいいよ」というメッセージ。「おもいの部屋」-「親を忘れなくていいんだよ」というメッセージ)を子どもが感じ取りその後遊びに来ることがない部屋のメッセージも受け取って帰ることができるのではないであろうか。

インタビューにおいて職員はレインボーハウスの活動の今後の改善点としては、「レインボーハウスの利用者をいかに増やすか」という点にある、と指摘していた。職員も述べていたがレインボーハウス(東京・神戸共に)来る親子は比較的経済的に豊かであったり、親子の周囲に支援する身内、仲間が多くいたりという窮極状態ではない親子が多い。職員は、究極状態の親子こそきて欲しい、という。現在レインボーハウスへの交通費は自費であるため、あしなが育英会は交通費の支給等も含め考えていかななくてはならないが、筆者は「レインボーハウス」が活動を継続させ、それを発信していくことこそが日本の全ての遺児への1番の「心理的援助」なのではないか、とこの1年を通し考える。宿泊プログラムに参加した子どもの母の記述で「夫を亡くして5年、母子ともにまだまだ心の苦しさが残り、子どもの心因的な症状に困っていたときにつどいのお知らせをいただき救われた思いでした。ここには私たちのことを受け止めてくださる方々がいると実感しました。また同じような思いですごされている家族がたくさんいらっしゃることも実感しました。ここでの思い出が明日からの元気の元に、心の支えになりそうです。」というものがあつた。また何かしらの理由により参加できない親子からも「あしなが育英会の活動の報告を聞いていることが私にとっての長年の大きな支えでした。」というお手紙が届いている(職員談より)。このような声からレインボーハウスに親子が来なくてもレインボーハウス活動継続の存在は遺児や遺児家族を支え続けられると考えられる。日本ではほとんどなされていない遺児への心理的支援を今後広めていくためメディア等の媒体を使って今後よりレインボーハウスの活動を日本全国に発信していくことが必要であるといえる。

※ この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

今年度 2007、2008 年度の研究成果を踏まえ順次発表予定。

① 2008 コミュニティ福祉学 研究科 紀要

④ 日本カウンセリング学会 学会

(調査地がまだ開設から1年を満たない施設へと当初の予定から変更となったため、先方の状況を考慮し2007年度は発表を控えた。)